

「国語年誌」第五号 一九八六年一〇月 神戸大学国語教育学会

『心』の報告者

武田充啓

間の力で叙述出来る筈がないと誰かが云つた事がある況私のして私の書いたものは懺悔ではない。

(『硝子戸の中』(大正四年))

朝日新聞の『入社ノ辞』(明治四十年)には、「近來の漱石は何か書かないと生きてゐる氣がしない」とある。また、『文展と芸術』(大正元年)に漱石は、「藝術は自己の表現に始まつて、自己の表現に終るものである」と書いてゐる。漱石にとって生きることは自己を書くことであつた。

自分の心の徑路を有りの儘に現はすことが出来たならば、さうして其儘を人にインプレッスする事が出来たならば、總ての罪惡と云ふものはないと思ふ。夫をしか思はせるに、一番宜いものは、有りの儘を有りの儘に書いた小説、良く出来た小説です。(講演『模倣と独立』(大正二年))

聖オーガスチンの懺悔、ルソーの懺悔、オピウムイーターの懺悔、——それらをいくら述べて行つても、本當の事實は人

「有りの儘に現はすこと」は、単に自己の過去の事實をそのまま打ち明けることではないし、自己を正当化するためのものでもない。それは何より自己を知るためのものであり、自己自身であらうとするためのものである。そして、漱石はそれには「告白」よりも「小説」だといふのである。

作品の中での「手紙」といふ表現装置の機能は、『行人』(大正元年)のHさんの「報告」から「心」(大正三年)の先生の「告白」へと変化を遂げている。正確にいうと『行人』での「報告者」は二郎とHさんである。一郎を「報告」していた二郎は、一步退いて、Hさんが「手紙」で「報告」してきた一郎を「報告」することになる。この二重の「報告者」の構造は「心」でも基本的になつていない。ただ「報告者」が「報告」するの

が自己自身であるというのが違いである。「報告」内容の他者から自己への変化は、「道草」（大正四年）では、漱石自身の過去を素材にした、いわば漱石が自己自身を「報告」するかたちへと発展することになる。それは、「自己の表現」を追求しようとする漱石の欲望の切実さや自己認識の深化に対応している。

『心』では、自己を「報告」してはたはずの「私」が、「手紙」による先生自身の「報告」を、つまりは先生の「告白」を「報告」することになる。「報告者」が身を引いて、別の「報告者」に席をゆずることが、ここでは無理なく滑らかに演じられているため、『門』から『行人』までにみられた長編小説としての構成的な破壊から免れている。そして、スムーズになった分だけ小説の質が損なわれたり、「自己の表現」が削られたりしているわけではない。漱石は『心』で、「自己の表現」へのひとつの「方法」を掴んだといつてよ。

作品の中の「報告者」はどのような「方法」をとるのであるか。『道草』では「報告者」漱石は小説舞台から姿を隠してしまっている。『心』はそういう観点からいえば、「報告者」が小説舞台上に登場する最後の小説であり、「私」も先生も共に「筆を執つて」自己を書き伝えようとしている点からも、この問いかけに適当な作品であると思われる。

ところで、『心』に登場する主要な人物たち、K、先生、「私」、

彼ら三人には固有の名が与えられていない。

「もし其男が私の生活の行路を横切らなかつたらば」（下十八）。自分にとって決定的な存在であったKとのいきさつを「手もなく、魔の通る前に立つて、其瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずになるたのと同じ事です」（同）という先生は、続けて「私は其友達を此所にKと呼んで置きます」（下十九）と書き、以後その名は明らかにされることなく、Kという頭文字のまま呼ばれていく。

小説の冒頭に記された文章をみてみよう。

わたくし

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此所でもたゞ先生

と書く文で本名は打ち明けない。

是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私にとつて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々々しい頭文字杯はとて

も使ふ氣にならない。（上一）

先生にとつてのK、「私」とつての先生、それぞれのあり方の違いが彼らの呼び方の違いに現れている。Kの生前、先生が彼をどのような名で呼んでいたにせよ、遺書に書くときにはKという「頭文字」で呼ぶことになったのであり、「私」は、先生をそ

の死後においてもやはり「先生」と呼び続けるのである。そして「私」は、「頭文字」を「餘所々々しい」ものと表現している。名前のないことと呼び方のズレに留意しつつ、その関係をみていくことで、彼らの「自己の表現」を考えてみたい。

二

Kと先生には「同郷の縁故」(下十九)がある。だが、先生は両親の残した財産を狙う叔父の裏切りによって、Kは「養家先」の意向に背いた「自分の偽りを白状して」(下二十)しまうことで、彼らは二人ともその故郷を喪くしてしまう。しかし、故郷の喪失は彼らには必然だったのである。

叔父の裏切りを受けた先生はいつている。

わたくし
私の世界は、たろころひるが學を翻へすやうに變りました。丈も是は私にとつて始めての経験ではなかつたのです。(中略)私は世の中にある美しいものゝ代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今迄其存在に少しも氣の付かなかつた異性に對して、めくら盲の眼が忽ち開いたのです。それ以來私の天地は全く新しくらしいものとなりました。(下七)

彼の「世界」を一変させ得たものが、故郷喪失以前にすでに存

在していたのである。そしてこの「恋愛」への秘められた神聖視こそが、従妹との結婚を不可能なものにし、叔父の裏切りを招き、つまりは故郷を捨てさせることになるのである。

一方「母のない男」(下二十一)Kには、勘当による以前にすでに故郷は奪われていたといつてよい。先生が持ち得た「もう一度あゝいふ生まれのままの姿に立ち歸つて生きてみたい」(下九)というような帰るべき場所、(自然)なる世界は、最初から与えられていなかった。「養父母を斯く」ことさえ「構はない」(同)といわせる「道」は、一人きりの世界に生きるKが持たざるを得なかつたものである。

故郷喪失の事件以前にすでに彼らの内にあつた理想は、彼らに故郷を戻り得ぬ場所とさせるだけでなく、以後の二人の存在根拠となる。理想は、そこにあるべき彼ら自身の本来の姿として、つねに彼らを先行し、彼らを誘う。そこに到達できないかぎり、彼らは彼ら自身ではあり得ない。彼らの理想をここでは(先行者)と呼び、それに寄り添いつつ、彼らの跡を辿つてみる。

「氣高い心持」をみせるKに対して、「美しいもの」を尊ぶ先生は、精神的な同族意識を持つていたとみてよい。しかし、やがてこの同族者の持つ(先行者)は、次第に先生のものとは別のものであることが明らかになる。

道のためには凡てを犠牲にすべきものだと言ふのが彼の第一信条なので、挿怒や禁怒は無論、たとひ怒を離れた戀そのものでも道の妨害まやかしになるのです。(下四十一)

「其頃から御嬢さんを思つてゐた」先生は、「怒を離れた戀」に現実の対象を得た以上、ただKを畏敬するだけではない。

私は其人に對して、殆んど信仰に近い愛を有つてゐたのです。私が宗教だけに用ひる此言葉を、若い女に應用するのを見て、貴方は變に思ふかも知れませんが、私は今でも固く信じてゐるのです。本當の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。(下十四)

Kが「道」をめざす「宗教家」であるならば、先生は「恋愛」を信仰する、やはりひとりの「宗教家」である。しかし、信条を別にする二人の宗教家は、そのことからただちに反目しあうわけではない。それぞれの「先行者」に忠実に、各々のやり方で固有名を得ようとするだけなのである。

先生の「先行者—恋愛」は、「自然」と不可分であり、それは喪失した「故郷」のことだといつてよい。もちろん、その「故郷」とは、彼が「何うかしてあゝいふ生まれたままの姿に立ち歸つて

生きてみたい」というときの、その「生まれたままの姿」が許される「故郷」としてのそれである。「恋愛」は、叔父の裏切りによつて「故郷」が許されなくなつた彼に残された、「自然」再現への唯一の可能性なのである。

一方、Kには帰るべき「故郷」はなかつた。彼は自分の生きる「現在」を自身で「尊とい過去」(下四十三)にしていかねばならなかつた。彼はそれを「未来」の自己自身への「道」として選んだのである。

しかし、「道」を焦るKが人間らしさを失くし、そこに喪失した「故郷」をみた先生が「家に連れて來」(下二十二)てその「自然」を復活させようとするとき、二人の宗教家に試練が訪れる。

御嬢さんの態度になると、知つてわざと遣るのか、知らないで無邪氣に遣るのか、其所の區別が一寸判断しない點がありました。(中略)さうして其嫌な所は、Kが宅へ來てから、始めて私の眼に着き出したのです。(下三十四)

自分の「嫉妬」なのか、彼女の「技巧」なのか決定できないこのような恋愛は、先生がかつて夢想していた完全かつ安全な「自然なる恋愛」とは、明らかに異なっている。「怒を離れた戀」は

その存在を許されず、先生はそうした自身の苦悶をKに語れない。

KはKで、かつて先生が経験した、異性による世界転回の洗礼を初めて体験することになる。だが彼には捨てられない信条と、築き上げたはずの「尊とい過去」があるのだ。

宗教家たちはそれぞれの信仰への困難さのままで苦悩し、新たに立ち現れた共有できぬ偶像のままで煩悶する。房州での旅中、彼らが象徴してみた「行商の態度」(下三十一)は、二人がそれぞれ(へ先行者)に忠実な「宗教家」ではなく、本来的自己だろうとするロマン的な欲望の、その引き取り手を捜しあぐねる行商人となつてしまったことを告げている。先生はKに対して、殺人の身振りを装うことまでしておきながら、ついにお嬢さんへの気持ちを持ち明けることができず、Kは「後向き」の儘、丁度好い、違つて呉れ」(下二十八)と死をも厭わぬ答えをしながら、やはり「寺」を訪ね歩く他にないのだ。

三

「二人の親しみに自から一種の惰性があつたため、思ひ切つてそれを突き破る勇氣が私に缺けてゐた」(下三十一)と先生はいう。Kは先生のためらいをよそに、御嬢さんへの気持ちを先生に告白する。何故、先生の方からはそれができなかったのか。先生がのちに「私」に語る(へ恋愛の階段説)でもいふべきものをみ

てみよう。恋は罪悪かと尋ねる「私」に、先生は「たしかに」と答える。

「何故ですか」

「何故だか今に解ります。今にぢやない。もう解つてゐる筈です。あなたの心はとつくの昔から既に戀で動いてゐるぢやありませんか」

(中略)

「今それ程動いちやみません」

「今あなたは物足りない結果私の所に動いて來たちやありませんか」

「それは左右かも知れません。然しそれは戀と違ひます」

「戀に上る階段なんです。異性と抱き合ふ順序として、まづ同性の私の所へ動いて來たのです」

「私には二つのものが全く性質を異にしてゐるやうに思はれます」

「いや同じです。私は男として何うしてもあなたに満足と與へられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、猶更あなたに満足と與へられないのです。私は實際御氣の毒に思つてゐます。あなたが私から餘所へ動いて行くのは仕方がない。私は寧ろそれを希望してゐるのです。」

然し………」（上十三）

これを先生とKの關係で考えれば、先生にはKの存在が、その「戀に上る階段」への「順序」としてあったということ、そして「餘所へ動いて」その対象を御嬢さんの方に移していったということが明らかになる。

先生は、故郷喪失前後の一時期を共にしたKに、いわば「第二の故郷」を見、その復活を望んだのだといつてもよい。しかし、それが再現されるべきものとして発見されたときには、先生はすでにそこを離れて、「戀に上る階段」を御嬢さんの方へ一歩進めた後であった。そうして初めて、先生はKが自分のへ恋人へであったことを知るのである。同様に、以前の故郷喪失のときにはおそらく、先生はその「階段」をKの方に一歩進めていたはずなのだ。先生のへ先行者へはつねに喪くした後に見い出されている。後の先生のへ恋愛の階段説へが物語るのは、「故郷」とは実は自らが捨てたものであり、それは「戀に上る階段」に在るかぎり、避けられない宿命なのだという真実であり、したがって先生が「一種の情性」のうちのみせる逡巡は、この「運命」への彼にできる精一杯の抗いの姿勢であったともいえるのである。

「戀に上る階段」は、彼のへ先行者へ恋愛へとは相容れないものとなつていく。それは、「戀を離れた戀」以上に続く階段であ

り、そこからは「生まれたままの姿」では上れない階段となる。先生は「人間らしいといふ言葉」（下三十一）でもってKにへ自然へを取り戻させようとした。しかし、それは当のへ自然へ捨てようとしている自分自身への「辯解」でもあったのだ。先生はKのいうように、「此人間らしいといふ言葉のうちに」「自分の弱點の凡てを隠して」（同）いたのである。

先生に向けられたKの告白は、捨てられようとする過去の恋人の最初にして最後の愛の告白である。それは、これまでみせてきた「變に高踏的な彼の態度」（下二十九）を改めて、初めて先生にへ正面へから向かい合おうとしたことだともいえよう。しかし、それは一歩遅かった。後に先生がいう「罪」とは、このKの姿勢に対して先生がとらざるを得なかった姿勢のことであり、向かい合おうとすることがつねに一歩遅れたかたちでしか許されない「運命」のことである。

先生は、御嬢さんにもその「後姿」をしか見ることが出来ない。Kの来る以前、母親も含めた三人の間で彼女の結婚話が出たとき、

さつき迄傍にゐて、あんまりだわと何とか云つて笑つて御嬢さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、背中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、其後姿を

見たのです。^{つと子が}後姿だけで人間の心が讀める筈はありません。

(下十八)

あるいは、Kと一緒にいるその笑い声を聞いて駆けつけたとき、

然し御嬢さんはもう其所にはゐなかつたのです。私は恰もKの室から逃れ出るやうに去る其後姿をちらりと認めた丈だけでした。(下三十二)

Kが同居するようになって初めて、やっと向かい合えたと思つたときには、意味をすり抜けていく「例の笑ひ」(下三十四)にはぐらかされ、あるいは「何處へ行つて好いか自分でも分らなく」(下三十三)なるような、めまいのうちに、その瞬間は過ぎていった。

「後姿」とは消え去つた本体の残像ではなく、いまここにあるはずの全体の一部であるということ。それは当然そこに向こう側、すなわちへ正面を併せ含んだ存在であるということ。へ正面は、へ自然は、へ真理はすぐそこにあるのだが、いまは向こうを向いていて、ここからは窺えない。このことが彼をして「後姿」を迫らせることになるのである。むしろ、へ正面が「生まれたままの姿」を意味するかぎりにおいて、彼はそれを希求する

のである。だが、へ正面とは、むしろへ空白を意味するのではないのか。「生まれたままの姿」とは、叔父の裏切りを受けた瞬間のめまいがへ空白の彼方に夢見た幻ではなかつたか。先生はKのへ正面に出会したとき、「恐ろしさの塊り」「苦しさの塊り」「何しろ一つの塊り」(下三十六)であるしかなかつたのではないか。へ自然とは、「後姿」の向こう側に見る夢に過ぎないのではないか。「人類」への不信から、御嬢さんと奥さんまでをすら疑わざるを得なかつたことはそれを語っているのではない。彼は幾度かそのロマン的欲望を挫折させてきたのである。

「後姿」がせつなく印象付けられてしまふのは、先生のロマン的なへ想いが彼の内部に引き起こす一切の苦悩が、その深刻さにもかかわらず、彼女にとって、また現実世界にとつて、何らの意味も持たはしないという隔絶、孤獨、なかなんぞ先生の欲望の死、無化される彼の存在を象徴して見せるからに他ならない。

先生にとつてへ恋愛は、本来の自己であり得る唯一の可能性である。しかし、そこでそれだけは見ることのできる「後姿」の姿勢とは、彼の欲望や情感が喚び起こす幻影ではないし、へ女性に纏わる捉えどころのなさといったものの喩でもない。それは彼のロマン的な憧憬の対象としてのへ女性へのイメージそのものであり、ロマンの対象としてへ女性を得ることの現世的可能性を自ら自体である。すなわちそれはへ恋愛の、真に愛し愛されるこ

との、真に存在することの不可能性そのものなのである。そして、だからこそ先生はそのロマン的欲望を、つまりは自分自身を、殺してしまわないためにも、「後姿」を追い続けるより他にないのである。彼の〈恋愛〉への〈想い〉は、同時に〈自然〉への絶望を抱えているのである。

しかし、先生がKを出し抜いて御嬢さんという現実の女性を手に入れるとき、彼が失うことになるのは彼女の「後姿」であり、したがって本来の彼自身である。

「いや考へたんぢやない。遣つたんです。遣つた後で驚ろいたんです。さうして非常に怖くなつたんです」（上十四）

「人間らしい」というしかない、こうした行為に導いていくものこそ「不可思議な力」（下五十五）であろう。恋愛に対してあれほど頑なだったKに、愛の告白をさせたのもこの力であった。ひとは誰も彼なりの〈先行者〉を持っている。しかし、どのような〈先行者〉を持ってしようと、彼が立っているのは「戀に上る階段」なのだ。そしてそこにあるかぎり、誘われざるを得ないのがこの「不可思議な力」の働く〈場〉なのである。そこでは、その時間、その空間を同時に生きること、経験することが許されていない。それらは先生がいうように、常にそこを離れた後に、

振り返って見い出される何もなかでしかない。その意味で、わたしたちには真の〈経験〉が許されていないといつてよい。そして、経験し得ないが故に、〈空白〉の内にいる間だけは〈幸福〉なのだ。

Kが先生に背を向けられることで知らされたのは、おそらくそうした力に翻弄されざるを得なくなる瞬間の〈空白〉人間の自然と、その場に居続けるわけにはいかない〈不幸〉人間の存在とであったのだろう。「弱點」を含んだ〈人間の自然〉を拒否し、一人きりの世界に殉じた彼は、その遺書に殆ど何も書かず自殺する。

暗闇で交わされた「横越」（下三十八）のやりとり、あるいはそれが二尺ばかり開けられるときには、「洋燈の灯を背中に受けてゐる」ためにそうとしか見えない「黒い影法師」（下四十三）。これらに象徴されるように、Kは愛の告白を除いて一度も先生にその〈正面〉を見せていない。房州への旅で先生が見せたKへの殺人の身振りが、「後から」（下二十八）されたのであれば、実際にKが死んだときに「向ふむきに突ツ伏してゐる」（下四十八）こともまた、当然なのかも知れない。先生はKの死顔とさえ向かい合うことが許されない。

私は突然Kの頭を抱へるやうに両手で少し持ち上げました。

私はKの死顔が一目見たかつたのです。然し俯伏になつてゐる彼の顔を、斯うして下から覗き込んだ時、私はすぐ其手を放してしまひました。傑とした許ではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。(中略)私は忽然と冷たくなつた此友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。(下四十九)

ここでは先生がへ先行者―K―死へ持つことを余儀なくされたことが理解されよう。先生がこれまでに経験したへ空白へは、いわばへ小さな死へである。しかし、時間をこちら側にしか与えず、それでいてそこを通り過ぎて振り返つて見ることをさせない「死」という最大のへ空白へは、些かのへ幸福へをも許さず、あらゆる意味付けを呑み込む。そしてKの「後姿」を永遠のものとするので、先生にそれ以外のへ先行者へをあり得なくさせるのである。

先生はKという個人への複雑なへ想いへを、妻の母親を「懇切に看護」(下五十四)すること、「出来る丈妻を親切に取り扱つて遣」(同)ることといった、全人類的な「大きな人道の立場から来る愛情」(同)へと移し変えることによつて、その最大のへ空白へから逃れようとする。しかし、そうした努力は、むしろ彼の存在を希薄にするだけである。孤独の極みに至つて先生は氣

付く。へ空白へに導く「不可思議な力」とは、実は「偶然外から襲つて来る」(同)ものではなく、「自分の胸の底に生まれた時から潜んでゐるもの」(同)だということを。だとすれば「生まれたままの姿」とは、へ自然へとは何であつたのか。

四

「死」と同義となつたKの名は、先生の固有の名に代わつて存し、彼を先行する。そうした状況のもとで、「私」が登場する。その先生との出合いは、彼らが言葉を交わす以前から始まつてゐる。

先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。(中略)すると先生は昨日と違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。(上二)

次の日私は先生の後につゞいて海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。(上三)

もう明らかであろう。先生は「私」のへ先行者ゝとなるのである。しかし、彼はそのことに無自覚ではいられないだろう。先生は「私」の固有の名を奪うわけにはいかないし、自分自身の名を取り戻さなくてはならないのだ。

「私」の「新しい命」として「宿る事」(下二)。Kの名を一個の頭文字に移し変えること。その試みは当然、「御嬢さん」が「妻」と呼び変えられた場合とは別の形を取らねばならない。彼はそのとき、誰とも向かい合うことなく彼女を手に入れたために、「新しい生涯」(下五十二)に入ることが出来なかつた。したがって、先生はこの場合、「振り返つて」「私」に向い合わねばならない。また「私」は先生のいるところまで、少くともその手前までたどり着く必要がある。私に先生を追わせるものへ先行者ゝなのだとすれば、このかぎりでは先生はそれを引き受けることになるだろう。

Kの葬られている雑司ヶ谷の墓地まで先生の「後を跟けて来た」(上五)。「私」は、彼を驚愕させる。また、それを何事でもなかつたかのように次回の墓参の「御伴を」(上六)せがむ。無邪気にへ自然を振りまく「私」に対して、先生は「迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安」(同)を示さずにはいられない。しかし、彼は「私」のへ自然を否定するわけではなく、

むしろそれを見守り、あるいは受け流しつつ、そうすることによって「私」のへ先行者ゝを演じ続けるのである。

先生は、「私」がいずれそのへ自然なる世界を失うことを知っている。かつてKを畏敬した頃の似姿を、「私」に見ていると云つてよい。今や、先生は人間らしさを奪われたKである。Kがへ自然を復活させたのは、先生の「人間らしいとか、人間らしくないとかいふ小理屈」(下三十一)ではなく、御嬢さんのへ自然であつた。しかし、猛進するだけの「私」のへ自然は、先生を振り返らせはしない。

「君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知つてゐますか」「とにかく戀は罪悪ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」(上十三)など、こうしたやりとりで代表される先生の「私」への気遣いの「言葉」は基本的に独白であり、独白的である。それらはつねに新たな謎へと導く誘ひとして立ち現れており、「私」はそれに引き込まれていくしかない。先生の体験をなぞることが、「私」に強いられた課題なのである。

先生はそれに気が付いてゐる様でもあり、又気が付かない様でもあつた。私は又輕微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかつた。寧ろそれとは反対で、不安に揺かされる度に、もつと前へ進みたくなつた。

もつと前へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前
に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。

(上四)

「後姿」であれ「言葉」であれ、それらはいまここにあるべき
真の姿、真の意味の不在を示している。そしてそのように示され
た、いまここで〈真理〉を獲得することの不可能性を否認すると
すれば、できることはそれを〈追うこと〉以外にはなかつた。し
かし、「死」を向こう側に持つKの「後姿」が唯一かつ永遠のも
のとなつた今、〈追うこと〉は先生にとつてロマン的欲望の存続
を保証することにはならない。「後姿」とそれを〈追うこと〉を
否定すること。自身が〈正面〉たるうとすること。彼はそれを自
己を語るることによつて果たそうとする。「告白」を意味するその
ことが、〈恋愛〉の、すなわち本来的存在たるうとする欲望の交
奏であることに疑いはない。先生の「告白」は〈恋愛〉によつて
しか成り立たないものであり、〈恋愛〉はまた「告白」による以
外には成立しないものである。そして、それらはやはり「死」以
外の〈場〉では不可能なのだ。

愛を迫られる女性のような、いぶかり、屑すかし、じらし、突
然の深刻さといった先生の身振りは、追う「私」への課題である
とともに「振り返つて」向かい合おうとする先生自身に課せられ

たものの困難さを示していることにもなる。彼は、こうした身振
りの内側で、Kの名を頭文字に移し変える作業をしているのであ
る。

当初、「貴方も淋しい人間ぢやないですか」との問いかけに

「ちつとも」(上七)と否定していた「私」は、「人間を果敢な
いものに観じた。人間の何うする事も出来ない持つて生まれた軽
薄を、果敢ないものに観じた」(上三十六)と洩らすようになる。

先生まで後一步のところに來ているのである。死に面してその
〈先行者〉たる「天子様」(中五)の死と一体化することを夢見、
固有の名を奪われたまま、そのことに気付くこともなく死んでい
こうとする父親をよそに、「歸つて來て、宅の事を監理する」

(中十五)ことを「私」に押し付けてくる兄は、彼なりのやり方
で自身の名を得ようとしている。家族の誰とも異和を感じずには
いられない「私」は、Kともごく近いところにいる。父の死は、
「私」に誰とも向かい合わせることもなく、故郷を過去のものとさ
せてしまふであろう。「私」が自身でその故郷を捨てること。そ
れが先生の「私」に課した最後の課題である。

父の臨終を眼の前にしながら、先生の「死」という〈空白〉に
誘われて汽車に飛び乗ることになる「私」は、それ自体はまさし
く〈自然〉な行為によつて、自身の〈自然〉故郷を捨てること
になる。自らの手で故郷を戻り得ぬものにするることによつて、自

分がもはや「生まれたままの姿」ではなく、そのへ自然へに「弱點」を持つ存在であることに気付くのである。

Kには最初から故郷が与えられていず、先生は誰とも向かい合うことなくその故郷を捨てねばならなかった。「私」はその故郷を捨てはしたものの、代わりに先生というひとりの人間と向かい合うことが出来たのである。しかし、三様の故郷喪失物語がすべてではない。

五

「私」は自分に何か欠けているという思い、あるいは溢れているという思いを「何うする事も出来ない持つて生まれた輕薄」という言葉にしている。しかし、彼は自分が何かを喪失したとは思っていない。先生はそんな「私」に対して、「あなたは自分の過去を有つには餘りに若過ぎた」(下二)と書いている。喪失したへ自然へを求めてへ追うへのでないところに、先生は自分が喪失したと思っているへ自然へを見たのである。ただし、このへ自然へは恐ろしいものを含んでいる。それは単にエゴイズムの問題ではない。自己のへ自然への肯定は他者のへ自然への犠牲の上にか成り立たない、といったことだけではないのだ。そこには自己が自己自身であるということさえ危うくさせてしまうへ自然へがあるということだ。この意味でへ自然へは、自己の内部にある外部、すなわち他者である。先生が「私」に与えたのは「過去」

であり、自分が自分自身であることを疑わざるを得なくさせるような事件であった。そしてそれが他でもない無垢なへ自然へが招き寄せたものであるということ、「不可思議な私」はへ自然へな「心」の内に棲んでいるのだということを知らしめることになるのである。

漱石が問題にしたかったのは、単に「自己本位」の肯定や否定といったことではない。自分が自分自身であろうとするごく当り前のことそのことがすでに「欲」であり、「罪」であるのだとしても、それを肯定するか否定するかが問題なのではない。たとえばKのように意識的にそれを否定しようとしても、そのように否定することによって支えようとしているのは、他ならぬ彼自身であるという逆説が存在してしまう。あるいは無意識的にそれを肯定するような行為をしてしまう先生には、それがまさに無意識的であるということによって、自分自身であるのかどうかを確かに引き受けることができない。最後には、先生はそれを「告白」することによって肯定し、死ぬことによって否定しようとしているかみえる。

大切なことは、自分が自分自身であらうとすることが何であるのかというのではない。それが「善」なのか「悪」なのかと問うことのまに、自己が自己自身である、ということは一体何なのか、ということである。それを支えようとする「私」が「不可思議な

私」でしかないとすればだ。

先生は人間を、そして自身を疑った。Kの死後、先生はKのよ
うに、彼一人の手で彼自身であらねばならなかった。そしてつい
に、先生が他者を求め、信じ、自分以外の人間とともに自己自身
になろうとするとき、その決意の意味するものは、一人きりで自分
自身であらうとすることの否定である。

私は妻さいに向かつてもし自分が殉死じゆんしするならば、明治の精神に
殉死じゆんしする積つもりだと答へました。(下五十六)

私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解
らせるやうに、今迄の叙述で己れを盡つした積です。(同)

先生は、完璧なはずのへ先行者―自然へに殉死するのではない。
彼が死ぬことはそれを否定することであり、遺書に自己を書き残
すことは「弱點」を含んだへ人間の自然へを肯定することである。
「明治の精神」とは、へ先行者へを持ち、しかもそれが彼自身
と距離のない形で生き得たものの「精神」をいうのであろう。そ
れが許される時代があつたかどうかではない。先生にとつてそれ
は、何らかの共同的な価値というよりまず、個人の実存的なへ想

いへである。先生が殉死したのだとすれば、「己れを離れずして
己れを超えること」を不可能だとする「運命」に抗う、先生自身
のへ想いへそれ自体にであらう。

先生が残すことになつた「生きた教訓」(下二)とは、自らを
彼のへ先行者へとしてへ後統者への「私」を育て上げ、その教育
の完成と自殺(向かい合うことと消え去ること)を同時に行うこ
とによつて、そうしたへ先行者へ―へ後統者への図式そのものを
解体してみせたことであらう。先生はそのことによつて「私」の
名を奪うことを回避し、へ先行者へをへ追うことへによつては自
身の名前など得られはしないことを教えたのである。

Kはその遺書に自己を語ることをしなかつた。書くべきことは、
すでに「聖書」や「仏典」や「コーラン」といった古典の書物に
書かれていたからである。

「私の過去は私丈の経験だから、私丈の所有と云つて差支ない」
(下二)という先生は、他の誰とも交換不可能な自己、そして
「私」を信じる人である。彼はそれを信じきるためにも、自分自
身の言葉で書き尽くさねばならなかつた。先生は自己を語るのに、
「何千萬とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に」(同)という条
件を付けている。この条件の成立が、先生をしてKのように黙し
て語らずに終ることから解放する。他でないこの自分を「受け入

れる事の出来ない人（阿）たちには「聖書」や「仏典」がある。先生に自己を自己自身の言葉で書くことを可能ならしめたのは、「私」という交換不可能な個人であり、またそれは彼との〈恋愛〉であったが故に「死」であるしかなかったのである。

「私」もまた、先生がそうしたように「叙述で己れを盡」さねばならないときがくる。しかし、彼はそれを先生のように自分自身の言葉で語ることを許されてはいない。彼が彼自身であることを確かめさせてくれるのは、先生という個人（「過去の恋人」）だけであり、過去の〈恋愛〉だけである。「貴方丈に」という特定の個人が目前にいるわけではない。にもかかわらず、「私」が「私」自身であるためには、誰かに自己を語らざるを得ないのである。彼は「貴方丈に」という戒めを破り、「先生の遺書」を公開する。それは裏切りではない。先生はもはや先行者〈であってはならないのだ。彼が「筆を執つても」、先生の名を「頭文字」にしないのは、「先生」と呼び続けるかぎり、向かい合おうとする先生の姿勢が、それだけは時間を超えて生き続けるからである。むしろそれは「後姿」ではない。だが、「先生と私」、「両親と私」と書き綴る「私」が、見たはずの〈正面〉、向かい合ったはずの自己を書こうとするときには、めまいそのものであった「先生の遺書」を、『先生と遺書』として〈引用〉するしかないのだ。それは、その〈正面〉こそが「弱點」を含んだ〈自然〉、

「不可思議な私」自身だからである。そして「告白」を、〈恋愛〉を、「死」を許されない「私」にとって、それが自己を語るため、自己を知るため、自己自身であろうとするために残された唯一つの「方法」だったのである。

名前のない三人は「先生の遺書」という〈場〉において向かい合うことになる。Kと先生は、この地上において漱石という名を得ることはなかった。「私」はそれを試みてはいるが、手に入れたわけではない。

自分自身をすら疑わざるを得ない者が、いかにしてその自己を知り、その自身であり得るか、というアポリアに対して、「私」が〈引用〉という「方法」を用いざるを得なかったように、彼もまた「心」の報告者である漱石は、「告白」ではなく、「小説」を必要としたのである。「私」が強いられた〈引用〉こそ、漱石にとっての「小説」なのである。

（たけだ・みつひろ）